縄文中期集落における火災住居の性格

― 馬場前遺跡・上ノ台A遺跡の事例分析から ―

小　暮　伸　之

1　はじめに

福島県浜通り地方では、1990 年代以降に縄文中期集落の大規模調査が矢継ぎ早に行われてきた。いわき市上ノ内遺跡（樫村 1994）、同市松ノ下遺跡（中山 2001）、同市横山 B 遺跡（猪狩 2001）、飯舘村上ノ台 A 遺跡（鈴鹿 1984・山内 1990）などは、その代表格と言えよう。最近では、常磐自動車道の建設に伴い楢葉町馬場前遺跡（阿部 2001、吉野 2002、吉田 2003）、富岡町前山 A 遺跡（菅原 2003）などが調査されている。

こうした情勢の中で、筆者は馬場前遺跡の 3 次調査に従事する機会に恵まれた。学生時代から興味を抱いていた縄文中期集落の実像に迫れたことは貴重な体験だったが、それ以上に、該期集落が内包するさまざまな課題に直面できたことは、大きな収穫であった。特に、表題に掲げた火災住居に関する諸事象は、筆者を最も当惑させたテーマである。今回は、この馬場前遺跡と上ノ台 A 遺跡で調査された火災住居について、集落内における分布の在り方や出土遺物の特徴を検討し、性格付けを試みるものである。

近年、福島市宮畑遺跡（西村 1999、斎藤 2001）や岩手県一戸町御所野遺跡（高田 1999・2001）では、意図的な放火が行われたと思われる火災住居が多数確認され、注目を集めている。また、北海道の事例を集成した大島直行氏は、縄文時代全般を通観して火災住居の時期的な出現傾向を明確に把握し、さらにアイヌ民族誌との対比から火災住居の性格を導き出している（大島 1994・1999・2001）。本稿は、これらの研究成果を参考にして分析を行っているため、屋上に屋を

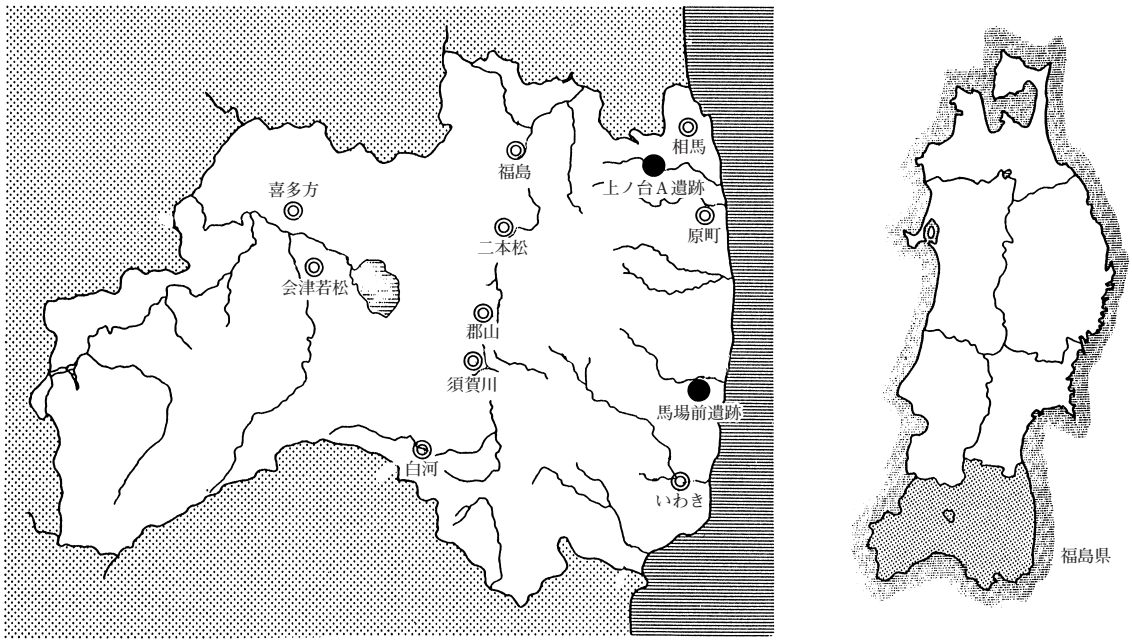


図１　馬場前遺跡・上ノ台 A 遺跡位置図

架した部分も多くあると思われる。大方の批判や叱責を乞い、今後の糧としていきたい。

2　分析方法

本稿では、まず、両遺跡の竪穴住居跡全ての埋まり方を報告書から推定し、埋没パターンとして類型化した。縄文時代の竪穴住居が一様に埋没したものでないことは、小林謙一氏によって繰り返し指摘されていることである（小林 1993・1996・1999 他）。筆者もその主旨に賛同するが、今回はテーマとした火災住居と、そうでない住居の違いを簡潔に表現するため、敢えて類型化という手段を用いた。埋没パターンは大きく 3 つに分類し、流入土を主体として埋没しているものをパターン a、2 種類以上の土が撹拌された状態の混土を主体として埋没しているものをパターン b、火災による上屋の崩落を示唆するような土を主体として埋没しているものをパターン c とした。なお、個々の堆積土の性格については、報告書の事実記載や遺構図などから筆者が独自に判断したものである。そのため、事実誤認した部分が多々あると思われる。混入物の少ない単一層がレンズ状に堆積しているものは、自然流入土と判断した。混土は層の上面が波打っていたり、床面に水平堆積していたり、床面に盛り上がるように堆積しているなど、一見すると人為的な堆積状況を示している場合が多い。炭化物や焼土を多く含む土は、火災などに起因して堆積したものと判断した。

次に、各遺跡ごとに当該地域の土器編年観（小暮 2003）に立脚した集落の変遷図を作成し、埋没パターンによって区別した竪穴住居跡の分布傾向を把握する。その際、各細別時期ごとに作成した分布図を提示するのがベストと思われたが、そうすると挿図枚数が多くなり、かえって煩雑になる恐れがあった。そのため、火災住居の性格を推定する上で示唆的と判断される時期の分布図に限定して掲載することにした。

また、特殊な埋まり方をした典型的な火災住居については、居住者の性格をより具体的に浮き上がらせるため、遺構図と遺物図を示して個別に解説している。

最後に、上記の分析結果を総合して考察を加え、縄文中期集落における火災住居の持つ意味について論述していきたいと考えている。

3　竪穴住居の埋没パターン

馬場前遺跡では、大木 8 a 式期～大木 10 式期に帰属する竪穴住居跡が 116 軒検出されている。その中から、帰属時期が不明確なものや堆積土の遺存状態が極めて悪いものを除外した 43 軒を分析対象として表 1 にピックアップした。細別時期ごとの埋没パターンの割合は、下記のようになる。

［大木 8 a 式期］　パターン c ；1 軒
［大木 8 b 式期］　パターン a ；1 軒
［大木 9 式中段階］　パターン a ；1 軒　パターン b ；5 軒
［大木 9 式新段階］　パターン a ；2 軒
［大木 10 式古段階］　パターン a ；12 軒　パターン b ；14 軒　パターン c ；3 軒

表１　馬場前遺跡の竪穴住居跡属性一覧

遺構No.	平面形	建替	規模（単位；m）		堆積土	複式炉			主柱穴	副炉	祭壇	埋甕	床面遺物	時期
			長軸長	短軸長	埋没パターン	埋没パターン	破壊部分	例様土器の黒色土	埋没パターン				出土状態	
20	B	有	9	8.1	c1	c1			cd					大木８a
138a	A	有	7.4	7.3	a1	不明			ad					大木８b
41	F		7	6.2	a5・a6	b1	Ⅱ		d				4	大木９（中）
12	A	有	4.7	5.2	b1	b1	ⅠⅡ	有	b				4	大木９（中）
33	D	有	5.1	4.7	b1	b1	ⅠⅡ	有	b					大木９（中）
59	不明		×	×	b1	b1		有	bd				3	大木９（中）
31	E	有	5.5	4.9	b4	b1		有	bd				3・4	大木９（中）
52	F		6.2	5.9	b4	b1			bd	①			4・5・6	大木９（中）
9	D		4	3.8	a1	a1		有	b					大木９（新）
42	A		5.2	5.2	a1	a1	Ⅱ	有	不明				4	大木９（新）
46	E	有	4.6	3.9	a1	b2		有	b1					大木10（古）
56b	D		4.6	4.6	a1	b2		有	ab			有		大木10（古）
111	D		5	4.8	a1	a1			d			有	4	大木10（古）
120	D		5.2	5.1	a1	b1		有	d	③			4	大木10（古）
133	不明		×	×	a1	a1			a				4	大木10（古）
151	F	有	5	4.8	a1	b1	ⅠⅡ		bd					大木10（古）
164	A		4.1	3.8	a1	a1			a			有		大木10（古）
75	不明	有	×	×	a1	a1	Ⅱ		不明					大木10（古）
43	F		6.2	6	a2	a2		有	ad	②			1・4	大木10（古）
113	E		5.4	4.8	a3	a1		有	b				3・4	大木10（古）
69	不明		×	5.2	a5	c2	ⅡⅢ	有	b				3・4	大木10（古）
44	A	有	7.2	6.8	a5・a6	b1	Ⅱ	有	bd			有	4	大木10（古）
45	A		6.4	6	b1	b1	ⅠⅡ	有	bd	②				大木10（古）
64	D		4.7	4.7	b1	b1	Ⅱ	有	b				4	大木10（古）
94a	不明	有	×	×	b1	b1			bd					大木10（古）
119	G		5.2	5	b1	b1	ⅡⅢ		b	②			5	大木10（古）
124	不明		4.4	4.2	b1	b1		有	b	②			2・4	大木10（古）
136	E		5.2	4.7	b1	b1			bd	②			2・4	大木10（古）
142	D	有	5.6	5.6	b1	b1		有	b	②			2・3・4・5・6	大木10（古）
158	不明		×	×	b1	b1			b	②			4	大木10（古）
11	A		5.3	5.3	b2	b2			b					大木10（古）
14	A		4.5	4.3	b2	b1	ⅠⅡⅢ		b					大木10（古）
109	F		5.6	5.5	b3	b1		有	bd		有		4	大木10（古）
65	D		6	5.7	b3・b4	b1	Ⅱ		b				4・6	大木10（古）
118	A	有	6.1	5.8	b3・b4	b1	Ⅰ	有	b	②			4・6	大木10（古）
97	A	有	5	4.7	b4	b1		有	bd					大木10（古）
17	不明		×	×	c1	b1	Ⅱ	有	cd					大木10（古）
86	F		6.8	6.8	c2	c2		有	cd		有		3・4・6	大木10（古）
156a	F	有	6.2	5.8	c3	c1			c		有		3・4・5・6	大木10（古）
116	D		5	4.8	a5	b1	ⅠⅡ		b	②			4	大木10（中）
40	D		4.7	7.2	b1	b1		有	b	②			1	大木10（中）
53	C		4.5	4.3	b1	b1			b	②			4	大木10（中）
34a	E	有	4.5	3.6	c1	c1			不明					大木10（新）

凡例　◇平 面 形；　・円形（A）・楕円形（B）・台形（C）・方形（D）・長方形（E）・五角形（F）・六角形（G）・不整形（H）

※長軸と短軸の差が50cm未満のものを円形・方形、50cm以上のものを楕円形・長方形とした。

◇堆 積 土；　・流入土（a1）・流入土→混土〔→繰り返し〕（a2）　・流入土→上層に黒色土を投棄（a3）

・流入土→上層に遺物を廃棄（a4）　・流入土→混土〔→繰り返し〕→上層に黒色土を投棄（a5）

・流入土→混土〔→繰り返し〕→上層に遺物を廃棄（a6）　・混土（b1）　・混土→流入土〔→繰り返し〕（b2）

・混土→上層に黒色土を投棄（b3）　・混土→上層に遺物を廃棄（b4）

・混土→流入土〔→繰り返し〕→上層に黒色土を投棄（b5）

・混土→流入土〔→繰り返し〕→上層に遺物を廃棄（b6）　・上屋の崩落土（c1）

・上屋の崩落土〔→祭祀的な行為〕（c2）　・上屋の崩落土→上層に遺物を廃棄（c3）

・上屋の崩落土→上層に黒色土を投棄（c4）

※複数のパターンが認められる場合は、「b3・b4」などと併記した。

※竪穴と複式炉の堆積土埋没パターンは、この表記で統一している。

◇複式炉の破壊部分；　・土器埋設部（Ⅰ）　・石組部（Ⅱ）　・前庭部（Ⅲ）

◇主柱穴の埋没過程；　・柱材を抜き取る→流入土（a）　・柱材を抜き取る→混土（b）

・上屋の崩落後柱材を抜き取る→混土（c）　・柱の痕跡を残すもの（d）

◇副　　炉；　・小型複式炉（①）　・地床炉（②）　・焼土を突き固める（③）

◇床面遺物；　・土器を遺棄する（1）　・土器の破片をまく（2）　・石器の集中出土（3）

・石棒、石皿、礫、磨凹石類を遺棄する（4）　・配石や置石（5）

・土器を床面に伏せた状態で遺棄する（6）

表２　上ノ台Ａ遺跡の竪穴住居跡属性一覧

遺構No.	平面形	建替	規模（単位；m）		堆積土	複式炉			主柱穴	副炉	祭壇	埋甕	床面遺物	時期	備考
			長軸長	短軸長	埋没パターン	埋没パターン	破壊部分	炉体土器の黒色土	埋没パターン				出土状態		
34	不明		×	×	b1	不明			不明					大木７ｂ	
71	A		6	5.8	c3	c1	Ⅲ		cd			有		大木９（古）	馬場前遺跡86・156a号住居跡と同じ埋没状況を示す
38	不明		×	×	a1	b1	Ⅱ	有	d				5	大木９（中）	
50	不明		×	×	a1	b1		有	不明					大木９（新）	
73	不明		×	×	a6	a1		有	不明				4	大木９（新）	
21	不明	有	×	×	c1	c1		有	不明					大木９（新）	炉体土器から骨片
25	不明		×	×	a1	b1	ⅠⅡ		不明					大木10（古）	
4	不明		×	×	a2	b1		有	a				4・5	大木10（古）	堆積土上層から骨片
33	不明		×	×	a3・a4	b1		有	b					大木10（古）	
39	C		5.3	4.6	a3・a4	a1		有	不明				1・4	大木10（古）	堆積土から骨片出土（イノシシ）
8	D	有	5.7	5.7	a5・a6	b1		有	d					大木10（古）	
56	不明	有	×	×	a5・a6	不明		有	不明				1	大木10（古）	
19	A		5.7	5.4	b2	b1		有	d					大木10（古）	
32b	不明	有	×	×	b4	不明			d	②			3	大木10（古）	堆積土から骨片・歯骨片が出土（ニホンジカ・イノシシ・タヌキ）
43	B		5.1	4.5	b4	b1		有	不明	②			5	大木10（古）	
55	C	有	4.9	4.5	b4	b1			不明	②			4・6	大木10（古）	
22	B		4.1	3.4	c1	c1		有	不明					大木10（古）	
20	B		4.3	3.7	c1	c1			不明				5	大木10（古）	
41	不明		×	×	c3	c1	ⅠⅡⅢ	有	不明					大木10（古）	
23	C		4.6	4.4	c3・c4	c1		有	不明					大木10（古）	
63	C		5.8	5.3	c4	c1		有	不明			有		大木10（古）	炉体土器から骨片
7	D		5.2	5.2	a1	a1		有	a	③			4	大木10（中）	炉体土器から骨片
9	D		4.3	4.1	a1	b1		有	不明				4	大木10（中）	
67	不明		×	×	a2	b1		有	不明				4	大木10（中）	
1	B		5.5	4.6	a3・a4	a1			不明			有	4・5	大木10（中）	
12	F	有	5.4	5.2	a3・a4	不明			b				1	大木10（中）	堆積土上層から骨片
46	C		5.5	5	a6	b1		有	d					大木10（中）	
5	不明		×	×	b1	b1			b					大木10（中）	炉体土器から骨片
3	不明		×	×	b1	b1	Ⅱ	有	b				1・4	大木10（中）	炉体土器から骨粉
10	不明	有	×	×	b1	不明			不明			有		大木10（中）	柱穴から骨片
13	B		4	3.5	b1	b1			不明	②			1	大木10（中）	
15	C		4.9	4.5	b1	b1			不明				3	大木10（中）	
36	D		4.2	4	b1	b1		有	bd					大木10（中）	
40	C		3.9	3.6	b1	不明	Ⅱ	有	不明	②		有		大木10（中）	
59	不明		×	×	b1	b1		有	b	②				大木10（中）	
14	F		5.9	5.2	b2	b1		有	不明			有		大木10（中）	
57	不明	有	×	×	b2	b1		有	不明				1	大木10（中）	
65	G		4.8	4.8	b2	b1		有	不明				2・4	大木10（中）	
6	C		5.1	4.9	b4	b1	Ⅱ		不明				4	大木10（中）	
17	A		3.6	3.4	b6	b1	Ⅱ		不明					大木10（中）	
48	不明		×	×	c1	不明	ⅠⅡⅢ	有	不明					大木10（中）	炉体土器から骨片出土
44	不明		×	×	c3	c1	Ⅱ	有	不明			有		大木10（中）	炉体土器から骨片出土
52	B		5	4.5	c3	不明		有	不明					大木10（中）	炉体土器から骨片出土
32a	不明		×	×	b1	不明		有	不明					大木10（新）	炉体土器から骨片出土
69	不明		×	×	b2	b1		有	不明				3	大木10（新）	炉体土器から骨片出土
24	F	有	5.4	4.8	b4	b1		有	不明	②			4	大木10（新）	堆積土から骨片が出土（ニホンジカ・イノシシ）
45	F		4.5	4.2	b4	b1	Ⅱ		不明					大木10（新）	

［大木10式中段階］　パターンａ；１軒　パターンｂ；２軒

［大木10式新段階］　パターンｃ；１軒

最も住居跡数が多い大木 10 式古段階の集落で各パターンの出現傾向を見てみると、パターン a とパターン b が一定数存在しているのに対して、パターン c は極端に少ないことが判る。パターン a・b は、本集落において竪穴住居の一般的な埋まり方であったと考えられる。特にパターン b は、新しい竪穴を掘った際に排出された土が近くの古い竪穴に投棄されていたことを示すものと思われる。それが、本遺跡のように多くの竪穴住居が近接して構築されるような集落の場合、最も手っ取り早い排土処理の方法であったと推察される。それに比べると、極端に数が少ないパターンｃは、かなり特殊な埋まり方であると言える。

一方、上ノ台A遺跡では、大木7b式期〜大木10式期に比定される竪穴住居が63軒確認されている。その中から、帰属時期や堆積土の状態が判明した47軒を表2にピックアップした。細別時期ごとの埋没パターンの割合は、下記の通りである。

[大木7b式期]　パターンb；1軒
[大木9式古段階]　パターンc；1軒
[大木9式中段階]　パターンa；1軒
[大木9式新段階]　パターンa；2軒　パターンc；1軒
[大木10式古段階]　パターンa；6軒　パターンb；4軒　パターンc；5軒
[大木10式中段階]　パターンa；6軒　パターンb；13軒　パターンc；3軒
[大木10式新段階]　パターンb；4軒

住居跡数が多い大木10式古・中段階の集落で各パターンの出現傾向を見てみると、馬場前遺跡と同様にパターンaとパターンbが多く、パターンcが少ないことが判る。古段階ではパターンcが5軒を数えるが、パターンaとパターンbの合計数の半分であることを考慮すると、やはり少ないと言えるだろう。したがって、上ノ台A遺跡でも、パターンcは数少ない特殊な埋没過程を示すものと考えられる。

4　集落内における火災住居の分布傾向

馬場前遺跡では、大木10式古段階の集落にパターンcの性格を示唆する分布傾向が認められた（図2）。本遺跡の該期竪穴住居群は、遺構の密度が希薄な広場的空間を中心にして環状に形成されていたものと考えられる。パターンcは17・86・156a号住居跡の3軒で、環状集落北側の外縁部にまとまって分布しているのが判る。

一方、上ノ台A遺跡では、大木9式古段階〜大木10式中段階の比較的長期間にわたってパターンcが認められた（図3・4）。本遺跡は、馬場前遺跡と同様に縄文中期の典型的な環状集落であるが、遺跡の北東部分は真野川によって浸食されたため流失している。竪穴住居は広場的空間を取り巻くように配置されているが、パターンcに限って見てみると、広場の南西側に隣接する区域に集中している状況が認められる。上記期間を通じて、特定の区域に連綿とパターンcが構築され続けていた事実は、この場所が本集落の中で何か特別な意味を持つ空間として集落構成員に認知されていたことを物語っている。

次に、両遺跡ともパターンcの構築される場所が特定されていた可能性が高いことに視点を定めて、論述していきたい。

縄文中期の環状集落において竪穴住居が複数の小群を形成するケースが多いことは、周知の事実である。また、その小群の中で複数の竪穴住居が切り合いながら存在している点を積極的に評価し、その現象の背後に強固な居住規制に縛られた血縁集団の存在を見通す研究者もいる。馬場前遺跡、上ノ台A遺跡の竪穴住居の配置図を見ても、そのような小群を視覚的にとらえることは可能であろう。特にパターンcとした住居は識別が容易であるため、他のパターンに比べて端的にそのまとまりを把握することができる。このことは、廃絶時に上屋を焼くという規

図２　馬場前遺跡竪穴住居跡配置図（大木 10 式古段階）

［大木 9 式古～新段階］

［大木 10 式古段階］

埋没パターン a

埋没パターン b

埋没パターン c

0　40m
(1/1000)

図中の数字は住居跡の遺構番号

図 3　上ノ台 A 遺跡竪穴住居跡配置図（大木 9 式古段階～大木 10 式古段階）

［大木 10 式中段階］

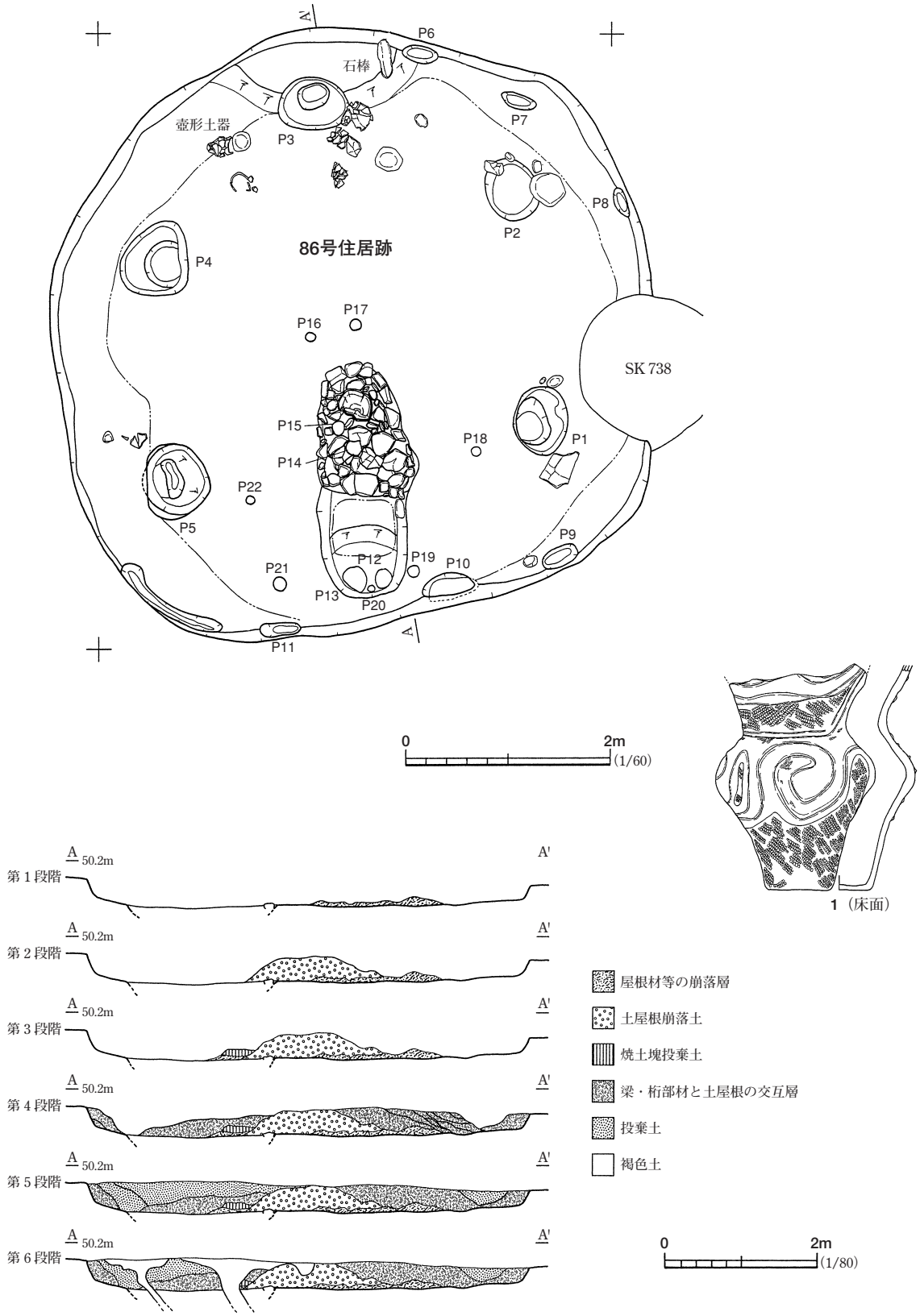
図 4　上ノ台 A 遺跡竪穴住居跡配置図（大木 10 式中段階）

範に縛られた集落構成員が、集団規制によって定められた特定の場所に居住していた事実を示唆しているように思える。

ところで、一般的にパターン c のような事例は、失火や地震などの偶発的な出来事に起因する火災住居、或いは病死や中毒死など、居住者の不幸な死に対して忌避的行為がなされた特殊な住居と解釈されることが多い。もし、馬場前遺跡や上ノ台 A 遺跡のパターン c がこのような災害に関連したものとするならば、分布がもっと広範囲にわたっているはずである。すなわち、火災は放火魔でもいない限り特定の区域で頻発することはありえない。まして上ノ台 A 遺跡のように長期にわたって特定の場所が被災することは極めて不自然である。また、病死や中毒死にしても集落を構成する全ての家族に等しく訪れる可能性があるもので、上ノ台 A 遺跡のように特定の場所に居を構えた家族だけが次々と見舞われるものではなかろう。したがって、これらの偶発的要因と両遺跡のパターン c の分布傾向を結びつけて考えることは困難であり、パターン c の背後には上記したような特殊な事情が存在したものと思われるのである。

5　火災住居の居住者について

前 2 項では、パターン c とした火災住居について、馬場前遺跡と上ノ台 A 遺跡における出現率や分布傾向の分析を通して、その特殊性を浮き上がらせてきた。本項では、パターン c の典



遺物：縮尺不同

図 5　馬場前遺跡 86 号住居跡と出土遺物

型的な事例を個別に取り上げ、居住者の性格について論及していきたい。

パターンｃと認定した竪穴住居は、馬場前遺跡の 17・20・34a・86・156a 号住居跡と上ノ台Ａ遺跡の 20・21・22・23・41・44・48・52・63・71 号住居跡である（表１・２）。この中から、馬場前遺跡の 86・156a 号住居跡をクローズアップして検討する。

図５に示した 86 号住居跡は、大木 10 式古段階に帰属する遺構である。5 本柱の住居跡で、平面形は五角形を呈している。複式炉主軸の延長線上にあたる北壁には、祭壇状の施設が作りつけられていた。

本住居跡では、廃絶に伴って多数の遺物が遺棄されており、その種類も豊富である。祭壇状施設の東側からは、竪穴の周壁に立てかけたような状態でひん岩製の石棒が出土した。また、軸項柱穴のＰ3 周辺では、5 個体の土器が床面に置かれた状態で出土している。これらはいずれも破損していることから、本住居使用時に用いられていたものではないと推察される。このような状況から、本住居跡の北側は、廃絶に際して祭壇状施設と軸項柱穴を中心に屋内祭祀が行われていた神聖な場所であった可能性が高いと考えられる。なお、Ｐ3 の西側で出土した壺形土器（図５－１）は精製した粘土で作られた優品である。文様部分が丁寧に磨かれ、最後に赤色塗彩して仕上げられている。また、各主柱穴の周辺からは石器類の出土が目立った。Ｐ1 の東側では 34 点の剥片・石核と 1 点の磨石からなる石製遺物の集中部が確認され、Ｐ2 の周囲では磨石類が多く出土している。

竪穴の埋没過程については、図 5 の下段に示した模式図を使って解説する。本住居の上屋は廃絶時に故意に燃やされたらしく、堆積土には多量の炭化材や焼土塊が含まれていた。断面図に示された土層の堆積状況からは、本住居跡が段階的に埋められたものであることが判明した。まず、第 1 段階では、上屋に火を放ったことによって崩れ落ちた梁や桁材の崩落層が形成される。第 2 段階では、住居中央に褐色土が盛り上がるようにして堆積しているが、これは前段階で焼失した屋根材の崩落に伴い、重量に耐えられなくなった屋根の中央が崩落して形成された層である。この褐色土の存在により、本住居跡は土葺き屋根の竪穴住居であったことが判明した。第 3 段階では、主柱穴付近の住居内の四隅や複式炉上に焼土塊を投棄している。また、この段階で何らかの儀式が行われたのであろうか、Ｐ16 ～ 22 の 7 本の細い杭を複式炉周辺に不整な六角形を描くように打ち込んでいる。この杭を打つ行為は、複式炉が埋没しても炉のおおよその位置を補足できるようにするためのものとも考えられる。第 4 段階では、土屋根の構成層と炭化材層が互層をなして堆積している。まだ完全に崩落していない屋根や周壁部分を人為的に崩落させ、住居の埋没を促進させたものと思われる。第 5 段階では、焼け残った屋根材や、屋根に葺かれている土を落としても埋まりきらなかった部分に土を投棄して、平坦地を造り出している。本住居跡の祭式を完結するために必要な行為であったのだろうか。最終の第 6 段階では、第 3 段階で複式炉の周囲に打ち込んだ細い杭を目印とするように、埋没しきった複式炉の石組部・前庭部に、それぞれ 2 本の太い杭を打ち込んでいる。まるで複式炉に最後の止めを刺すような行為である。

図 6 に示した 156 a 号住居跡は大木 10 式古段階に比定される。5 本柱の住居跡で、平面形は

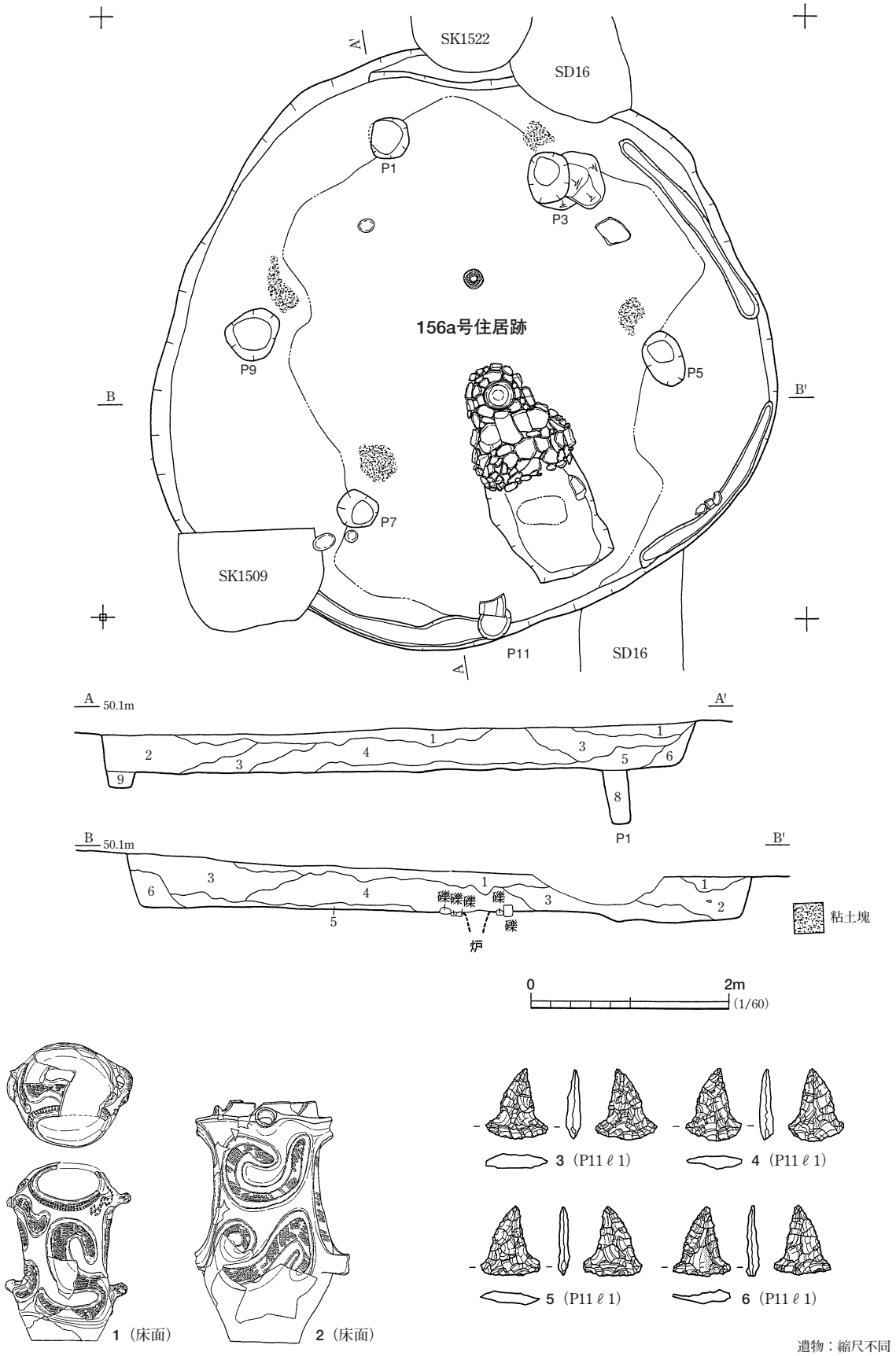


図 6　馬場前遺跡 156a 号住居跡と出土遺物

五角形を呈している。北壁には三日月形の微高地が作りつけられていた。この微高地は、複式炉主軸の延長線上からやや東に外れた位置にある。報告書の事実記載では、この微高地付近に出入口の存在を想定しているが、86 号住居跡との類似性を重視すると祭壇状の施設の可能性が高いため、ここに訂正しておきたい。

本住居跡では、廃絶時に多量の遺物を床面に置き去りにしている。複式炉と北壁の中間には、深鉢形土器が口縁部を伏せた状態で遺棄されていた。図６－１・２に示した香炉形土器と注口土器は、横倒しに押し潰された状態で複式炉西側からまとまって出土している。この１・２は、いずれも精選された粘土が使われており、文様間は小石などを使って丁寧に磨き上げられている。1 の把手部から底部にかけては、土器に取り付けられた紐の痕跡が観察された。複式炉の南側に位置するＰ11 からは、11 点の剝片石器が出土した。この中には、図６－３～６に示したサメの歯牙を模倣して製作されたと推察される異形石器が 4 点含まれている。これらは平面形や大きさがほぼ同じであることから、規格品と考えられる。また、主柱穴Ｐ７の周囲からは、表面に煤が付着した状態の楕円礫が見つかっている。

竪穴の埋没過程については、図 6 の中段に示した断面図を使って解説する。本住居の上屋は、廃絶時に故意に燃やされたらしく、堆積土には多量の炭化材や焼土塊が含まれていた。断面図に示された土層の堆積状況からは、本住居跡が段階的に埋められたものであることが判明した。第 1 段階では、床面上に火熱で燻されたような細かい炭化材を多量に含んだ黒色土（ℓ5・6）が堆積している。第 2 段階では、黄褐色土（ℓ4）が遺構中央で小さな塚状に盛り上がって堆積し、第 3 段階では、ℓ4 の周囲を同心円状に取り巻いて炭化材を多量に含んだ暗黄褐色土（ℓ2・3）が堆積していた。この第１～３段階で堆積した土は、遺構の周囲から流入したり、人為的に埋め戻されて堆積したものではなく、竪穴の真上から間髪を入れず次々に落下して堆積したものと推察される。最後の第 4 段階に堆積した暗黄褐色土（ℓ1）には、多量の土器片が含まれていた。このような埋没状況から、①本住居跡の上屋は土を葺いた土屋根構造であること、②廃絶に際しては、まず火をかけられ、土屋根の下地だった樹皮などの屋根材が焼け落ちて床面上に堆積し、次に土屋根を支える棟材が焼け落ち、それに伴って火熱を受けた焼土塊を含む葺土が遺構中央部から外側に向かって段階的に崩れ落ちたことが想定される。そして、埋没最終段階に廃棄された多量の土器片は、竪穴住居に対する儀礼的な行為を完結する意図があったのではないかと考えている。

以上、典型的な火災住居と思われる事例について、竪穴廃絶時の状況や埋没過程を中心に概略を述べてきた。両竪穴の遺物出土状態からは、廃絶に際して何らかの屋内祭祀が行われていたことことが推測できる。特に 86 号住居跡では、北壁の祭壇状施設と軸頂柱穴の周辺で土器や石棒を使った祭祀が行われていた状況が明確に把握された。また、竪穴の埋没状態からは、上屋に故意に火を放ち屋根材を崩落させてから、一連の祭式を完結させるような行為がなされていることが判明した。86 号住居跡では埋没最終段階で複式炉に太い杭を打ち込んだ状況が窺え、156 a 号住居跡では最後の凹地に土器片を廃棄している。このように、パターン c に分類した火災住居の細部をつぶさに見てくると、廃絶に際して共通の手順に則った祭祀が行われていた可

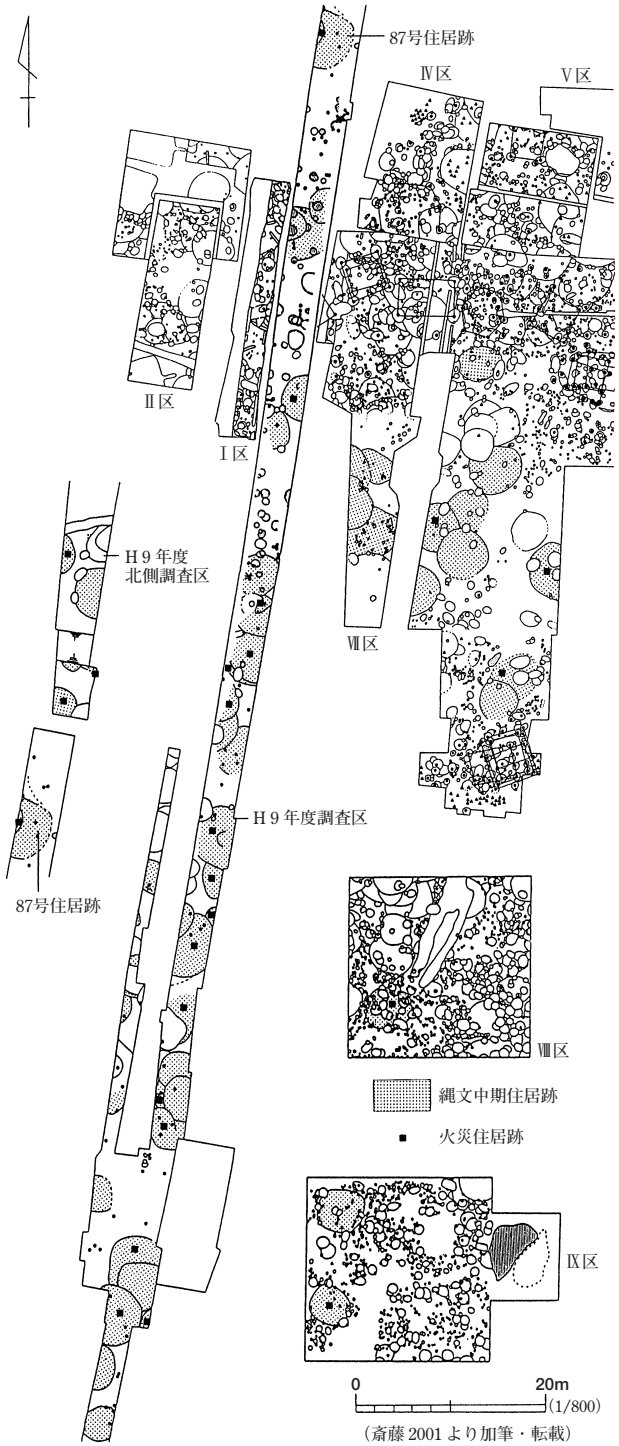
能性が高いことが判る。

それでは、「家送り」にも似た特殊な祭祀的行為によって廃絶された住居の居住者とは、集落内においてどのような役割を果たしていたのであろうか。それを考える上で、86 号住居跡から出土した壺形土器、156 a 号住居跡から出土した香炉形土器、注口土器、異形石器は、重要な示唆を与えてくれる。これらは製作に手間のかかる希少品であるため、全ての竪穴住居から出土するというものではない。馬場前遺跡では上記 2 軒のみが保有しており、言わば特定の住居に限定された所有形態を示している。こうした優品の所持は集落構成員によって認知されるものであったと考えるならば、その所持者は村で首長的な役割や司祭者的な役割を果たしていた特別な人物であった蓋然性が高くなる。ただし、翡翠製の大珠のように高価な威信財ではないため、傑出した地位にある人物の存在を想定することはできないと考える。

6　まとめと今後の展望

本稿では、火災を伴う特殊な廃絶方法が適用された竪穴住居について、集落内における出現率や分布傾向の把握、細かな事例分析を行い、その性格について論じてきた。分析対象としては、報告書の事実記載から住居跡の埋没過程が復原でき、なおかつ広場的空間や住居跡群・土坑群の配置が面的に把握できる大規模調査例が最適と思われたため、浜通り地方で調査された代表的な縄文中期集落である馬場前遺跡と上ノ台 A 遺跡を取り上げた。その結果、パターン c に分類される火災住居は検出数が少なく、長期にわたって集落内で構築される場所が特定されていたことが明らかになった。そして、住居の廃絶時に行われる祭式には、細かな方法はともかくとして、一定の規範に則った手順が存在したらしいことも推測されたのである。また、個々の事例分析では、こうした住居跡に日用品ではない特殊な遺物の出土が見られることから、首長或いは司祭者的性格を持った居住者像を想定した。これらを総合すると、縄文中期集落には村の統制や祭祀を取り仕切る人物が存在し、その人物の死などに起因して竪穴住居を廃絶する場合には、集落構成員の間で取り決められたルールに基づいて特別な葬送儀礼が執行されていた可能性が高くなるのである。そこには、集落構成員に特別視されていた人物とその家族に対する畏敬の念が存在したのかもしれない。

さて、本稿では火災住居の性格について、上記のような結論に到達したわけであるが、次に述べるような様々な問題点が未解決のまま残されている。第 1 は、火災住居を認定する場合の基準についてである。これは大島直行氏の指摘にもあるように、遺跡の発掘を担当した調査員や研究者の主観に左右される場合が多く、統一した基準が存在するわけではない。大島氏は、堆積土中に焼土塊・炭化材が顕著に含まれるケースと、床面・周壁に焼土面が認められるケースについて検討し、この両者の違いが上屋構造の違いに対応する可能性を指摘した。すなわち、焼土塊・炭化材は土葺き屋根が崩落したことにより葺土や屋根材が土中で燻されて形成されたもの、焼土面は火の回りが早く完全燃焼の度合いも大きい茅葺き屋根の一般的な住居で形成されたものとし、両ケースとも火災住居として認定し得ると述べている。福島市の宮畑遺跡で確認された火災住居には、焼土層が厚く形成されているものが多いが、大きな炭化材を出土する



（斎藤 2001 より加筆・転載）

図７　宮畑遺跡遺構検出図

事例は少ないようである。また、焼土の堆積状況も一様ではなく、竪穴内で焼土の堆積場所が偏在する例や焼土層の下に炭化物層が形成された例が見られるなど、いくつかのバリエーションが認められる。岩手県一戸町の御所野遺跡では、床面上に厚さ 10㎝ 前後の焼土層が形成され、その上に被熱しなかった黒色の葺土が堆積している。焼土層がかなり厚く形成された宮畑遺跡、馬場前遺跡、上ノ台 A 遺跡の火災住居とは、異なった在り方を示している。これらの事例は、火災時の気象条件の違いから様々な火災状況が発生し得ること、したがって、焼土層や焼土面の形成に様々な変化が生じる可能性が高いことを示唆しているように思われる。平成 14 年 4 月にオープンした御所野縄文公園の縄文博物館では、竪穴住居の焼成実験を今後も継続していくようであるが、現実の火災ではどのような堆積状況が発生するのか、そのメカニズムをこうした実験データから明らかにしていく取り組みが重要になってくるものと私考している。第 2 は、火災住居が集落によって個別の分布傾向を示す点をどのように理解するかである。大島氏によると北海道登別市の千歳 6 遺跡や苫小牧市美沢 1・11 遺跡では、中期末葉の火災住居が南北 2 群に分かれる集落構成のどちらか一群に偏って分布している状況が窺えるという。福島市の宮畑遺跡（図 7）では、中期後葉の火災痕跡が 47 軒中 21 軒の住居跡で認められ、突出した火災発生率を示している。また、集落内での分布状況も、居住域のほぼ全域に広がっているようで、他遺跡での在り方とは大きく異なる様相を呈している。今後は、各集落の構成員や存続期間の違い、季節的な移動サイクルの違いなどが、火災住居の出現率や分布傾向にどのような差となって現れているのかを具体的に検討していく必要があると思われる。

7　結び

最後に、当該地域を対象とした既存の研究成果との対比を行って締めくくりとしたい。

飯舘村の真野ダム建設に伴い発掘調査された大倉地区遺跡群の屋内祭祀を分析した能登谷宣康氏は、複式炉前庭部に埋設土器を持つ住居、奥壁部に配石遺構を持つ住居、出入口に埋甕を持つ住居に対し、集落内における分布傾向、遺構の規模、出土遺物の在り方を通して、性格付けを試みている（能登谷 1996）。その結果、上記の屋内施設を持つ住居跡に特殊性は認められないとし、これらを各住居単位で行われた日常的な屋内祭祀の存在を傍証するものと位置付けている。その一方で、能登谷氏は、具体的な根拠は見いだせないとしながらも、専門の司祭者の指揮の下、集落内外に住む人々が中心的集落の広場で一堂に会して行うような集団祭祀の存在も予測した。本稿では、縄文中期末葉に多元的な祭祀形態が存在したとする能登谷氏の推論を火災住居との関連で検証するために、竪穴の埋没パターンとそれ以外の諸属性（複式炉の破壊状況・複式炉以外の副次的な炉の有無・祭壇状施設の有無・埋甕の有無・特異な遺物出土状態の在り方）との間に有意な関連性が見いだせないかどうか探ってみた。その結果は表 1・2 に示した通りで、各埋没パターンに特徴的な属性を見いだすことはできなかった。土器を床面に伏せた状態で遺棄する事例や土器片（貝塚地帯においては貝殻）を意図的に屋内に集積する事例は、廃屋葬との関係で注目されてきた現象であるが、火災住居はこれらとも有意な関連性を持たないようである。このことは、火災住居で執行された特別な人物に対する集団的な葬送儀礼と各住居の居住者の都合で執行された屋内祭祀が明確に線引きされていたことを示している。この点で、筆者が本稿で行った分析結果と能登谷氏の論考は整合性を持つと判断している。

能登谷氏と同じフィールドで中期末葉の集落景観を復原した井憲治氏は、当該期の集落が 1 遺跡を単位とするような小規模なものではなく、複数の遺跡にまたがるような広範囲に居住域・埋甕域・貯蔵穴域を配置する計画的なものであったとする仮説を提示した（井 1996）。このような観点から大倉地区遺跡群を再検討するならば、中心的集落と考えられている上ノ台 A 遺跡から離れた遺跡に立地する敷石住居も特殊性を帯びてくるとする井氏の見解には、傾聴に値するものがある。福島県では大倉地区遺跡群の他に、福島市の摺上川ダム遺跡群や三春町の三春ダム遺跡群など面的な調査事例が蓄積されてきている。現実の集落内における火災住居の位置付けを、こうした遺跡群研究の中で把握しようとする場合には、看過できない視点と言えよう。また、それに付随して考えなければならないことに、前項でも触れた集団移動の問題がある。この点に関しては、佐藤啓氏が屋内施設に着目して集落内での人の動きを把握する方法論を提示している（佐藤 1998）。佐藤氏が述べるように、現実の縄文集落の動態は土器型式による物差しでは把握しきれない部分が確かに存在するわけで、それを補うものとして遺構の細部に着目した分析方法を駆使することは有効であると思われる。

これで本稿を擱筆する。本来ならば、いわき市愛谷遺跡（馬目・樫村 1985）など浜通り地方を代表するような中期集落や、中通り・会津地方で調査された該期集落も加えて検討すべきであったが、今回それはできなかった。また、時期的にも中期末葉に限定されてしまった点も火災住居の全体像を把握する上では片手落ちであったと言わざるを得ない。これらは反省点として

銘記し、再検討の上、後日改めて起稿したいと考えている。

［謝辞］本稿を草するにあたり、岩手県一戸町教育委員会の中村明央氏、福島県文化振興事業団の吉田秀享氏、坂田由紀子氏には貴重なご教示とご助言をいただきました。ここに深く感謝申し上げます。

引用参考文献

鈴鹿良一　1984「上ノ台Ａ遺跡（第１次）」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅴ』福島県教育委員会
馬目順一・樫村友延　1985「愛谷遺跡―いわき好間中核工業団地造成事業に伴う調査―」『いわき市埋蔵文化財調査報告第 12 冊』いわき市教育委員会
山内幹夫　1990「上ノ台 Ａ遺跡（第２次）」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告ⅩⅣ』福島県教育委員会
小林謙一　1993「縄文遺跡における廃棄行為復元の試み―住居覆土中一括遺存遺物及び炉体土器の接合関係―」『異貌第十三号』共同体研究会
大島直行　1994「縄文時代の火災住居―北海道を中心として―」『考古学雑誌第 80 巻第１号』日本考古學會
樫村友延　1994『上ノ内遺跡―縄文時代から平安時代の集落跡の調査―』いわき市教育委員会
井　憲治　1996「真野川上流域における縄文中期末葉の集落構成」『論集しのぶ考古』論集しのぶ考古刊行会
小林謙一　1996「竪穴住居跡のライフサイクルからみた住居廃絶時の状況―南関東の縄文中期集落での遺物出土状態を中心に―」『すまいの考古学―住居の廃絶をめぐって』山梨県考古学協会
能登谷宣康　1996「縄文時代中期末葉の竪穴住居址にみられる特殊施設―相馬郡飯舘村大倉上ノ台地区の屋内祭祀―」『論集しのぶ考古』論集しのぶ考古刊行会
佐藤　啓　1998「集落研究における複数住居跡群の検討―「特性」と「居住回数」を用いて―」『しのぶ考古 11』目黒吉明
大島直行　1999「縄文時代火災住居の意味」『月刊考古学ジャーナル №447』ニュー・サイエンス社
小林謙一　1999「いわゆる「火災住居」跡の調査と解釈」『月刊考古学ジャーナル №447』ニュー・サイエンス社
高田和徳　1999「縄文時代の火災住居」『月刊考古学ジャーナル №447』ニュー・サイエンス社
西村博幸　1999「福島県福島市宮畑遺跡」『月刊考古学ジャーナル №447』ニュー・サイエンス社
阿部知己　2001「馬場前遺跡（１次調査）」『常磐自動車道遺跡調査報告 25』福島県教育委員会
猪狩忠雄　2001『横山Ｂ遺跡―旧石器～江戸時代の調査―』いわき市教育委員会
大島直行　2001「焼失住居にみる縄文の家送り」『宮畑縄文人の家を考える～焼けた家の謎～』福島市教育委員会
斎藤義弘　2001「宮畑遺跡の焼失住居跡」『宮畑縄文人の家を考える～焼けた家の謎～』福島市教育委員会
高田和徳　2001「焼失住居の調査と実験」『宮畑縄文人の家を考える～焼けた家の謎～』福島市教育委員会
中山雅弘　2001『松ノ下遺跡―縄文中期集落の調査―』いわき市教育委員会
吉野滋夫　2002「馬場前遺跡（２次調査）」『常磐自動車道遺跡調査報告 29』福島県教育委員会
小暮伸之　2003「外縁地域の大木式土器―楢葉町馬場前遺跡における縄文時代中期後半の土器変遷―」『福島県文化財センター白河館研究紀要 2002』福島県教育委員会
菅原祥夫　2003「前山Ａ遺跡」『常磐自動車道遺跡調査報告 35』福島県教育委員会
吉田秀享　2003「馬場前遺跡（２・３次調査）」『常磐自動車道遺跡調査報告 34』福島県教育委員会